

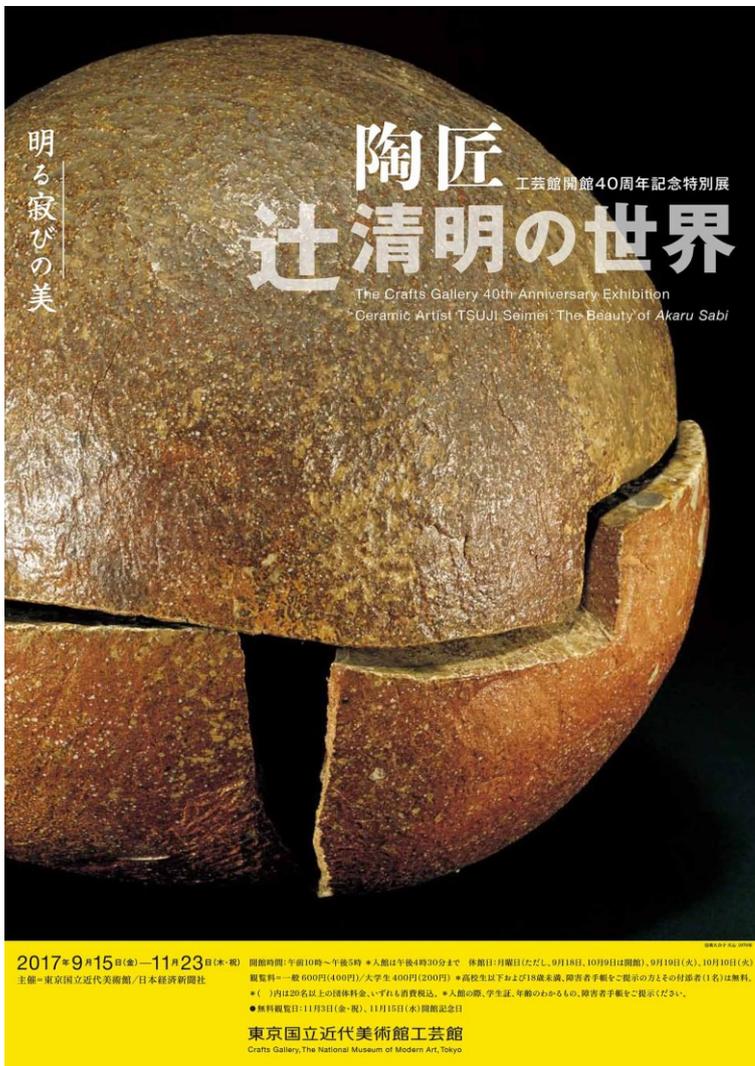
工芸館開館40周年記念特別展

陶匠 辻清明の世界—明る寂びの美

Ceramic Artist TSUJI Seimei: The Beauty of *Akaru Sabi*

2017年9月15日(金)～11月23日(木・祝)

- ◆東京に登窯を築き、信楽の素材と技法から独自に「明る寂びの美」を極めた陶芸家・辻清明の、円熟期の代表作約120点を展示。
- ◆ピーター・ヴォーコス（陶芸家）や山口長男（洋画家）ら、工房で交流した芸術家による陶の作品を紹介。
- ◆大の蒐集家であった辻の古代土器や古信楽などのコレクションから制作につながる美意識を探る。



(左) 広報用図版①：ポスター
(右) 広報用図版②：作家肖像

辻清明（1927-2008）は、1955年に東京・多摩に登窯を築いて以降、信楽の土を用いた無釉焼き締め陶を活動の中心とした作家です。古美術の蒐集や芸術家との交流を通して感性を磨き、「明る寂び」と呼ばれる信楽特有の美の世界を構築しました。工芸館開館40周年と、辻の没後10年を記念して開催する本展では、茶陶やオブジェなどの代表作とともに、古信楽や古代ペルーの土器など、きびしい目で選び抜かれた愛蔵品や、洋画家の山口長男やアメリカの陶芸家ピーター・ヴォーコスら、芸術家が辻の陶房で制作した作品なども紹介し、辻清明という陶芸家の創作の軌跡を振り返ります。

報道関係の方の
お問合せ先

東京国立近代美術館工芸館

展覧会担当／唐澤、野見山 広報担当／高橋

Tel：03-3211-7781（工芸課直通） E-mail：koge-pr@momat.go.jp

掲載用お問合せ先

Tel：03-5777-8600（ハローダイヤル）

公式HP

<http://www.momat.go.jp>

明る寂び

「寂び」の考え方を「冷え寂び」「暗寂び」などに分類した山口諭助の著書『美の日本的完成』に出会い、辻清明は古信楽に「明る寂び」の美を見出します。優美でのびやかで、夜明けの空に似て明るく澄んだ気配があり、そこはかとない華やかさや軽いユーモアを含んだ「明る寂び」の意識は、以降の辻の作品に大きな影響を与えています。



自然釉

窯の中の灰が素地に付着して釉薬による装飾のように表れる自然釉は、高温で焼き締めを行う信楽特有の景色です。辻は貝殻を焼成によって石灰化させて模様とするなど様々な表現を試みています。

広報用図版④：信楽自然釉茶盃



広報用図版③：信楽大合子 天心

天心

「堅く焼き締め、火割れを起こした大合子は、宇宙のシンボルだ」と語る辻は、この作品をいつも手元に置いて眺めていたといいます。信楽の素材や技法の特長を引き出しながら、既存の形式に収まらない、辻の考える「明る寂び」の世界に融合されています。

茶陶

辻清明が工房の一角に設けた茶室には、炉縁や床かまち、にじり口などに古寺の木材が用いられ、古美術蒐集家らしいこだわりが随所にあられています。本展では自然釉のほか、掛分や絵唐津など、多彩な技法で制作された水指や茶入、花生などの作品を組み合わせて、茶席をイメージした展示を行います。

※工芸館開館40周年と作家の没後10年を記念して、辻清明の茶碗で味わう「呈茶」を行います。日程、参加方法は後日ホームページでお知らせします。



広報用図版⑤：聚楽掛分茶壺



広報用図版⑥：信楽耳付水指



(参考図版：茶室 辻清明自邸)



広報用図版⑦：信楽陶缶（左、中央）、磁器土陶缶（右）

ユーモア

缶切りで蓋を開いた形の花生やラベルまで再現した瓶、のんびりした表情のナマズや、羊、亀などの動物の作品など、辻清明の遊び心が垣間見られる作品も紹介します。シルクハットやステッキなどをかたどった作品は「日本の暮らしと縁のない世界の人々に日本のやきものの味わいや力を理解してもらうための作品」と語っています。



広報用図版⑧：信楽帽子、信楽ステッキ



広報用図版⑨：信楽山羊角杯



参考図版：
 《彩陶鳥形笛》
 紀元前1世紀／ペルー
 愛知県陶磁美術館蔵
 撮影：藤森武

古美術

父の影響で、4、5歳のころにはすでに古美術に関心があったという辻は、生涯にわたって国内外の名品を蒐集しつづけました。本展では、「明る寂び」のインスピレーションを与えた古信楽の優品をはじめ、古代ペルーの土器や漆の作品なども交え辻清明のコレクションを紹介します。

富本先生、波山先生

中学生時代には富本憲吉や板谷波山の自宅を訪ねて指導を仰いだ辻清明。少年ながら研究熱心な彼に板谷波山は、釉薬の層を見せようと自作を割ってみせたこともあったそうです。本展ではそれぞれの“先生”から、異なる批評を受けたと述懐する少年時代の香炉など、辻清明初期の作品の一部も紹介します。

東京に登窯

辻清明は、信楽の素材と技法を用いながら、その制作のほとんどを東京・多摩の工房で行いました。東京には珍しい“登窯”をもつ工房には、陶芸家だけでなく、画家、作家など多くの芸術家が訪ねてくるようになりました。山口長男や、サム・フランシスら、辻の工房で陶に挑戦した画家の他、同じく陶芸家である妻・協との“武者修行”や、藤原啓ら、備前の作家との出会いなど、辻清明の創作活動の傍らには、多くの人との交流がありました。

アメリカの前衛陶芸家

ピーター・ヴォーコス（1924-2002）は、大型のクレイワークによってアメリカの前衛陶芸を牽引してきた芸術家で、日本のオブジェ表現にも大きな影響を与えたひとりです。1983年、展覧会開催のために来日した際、辻の工房を訪れ、手回しロクロによる作陶に挑戦したほか、辻と陶芸について懇談しています。



参考図版：
 ピーター・ヴォーコス
 《水指》1983～1991年頃
 東京国立近代美術館蔵

【作家略歴】

| 年 | (年齢) | |
|-------|------|--|
| 1927年 | (0) | 1月4日、東京府荏原郡世田谷町大字大師堂（現・世田谷区太子堂）に生まれる。 *幼少期から父親の影響で 古美術 に興味をもち、9歳の誕生日に野々村仁清《色絵雄鳥香炉》を買ってもらう。 |
| 1941年 | (14) | 自宅に姉の輝子とともに「辻陶器研究所」の看板を掲げ、陶芸家の道を歩みだす。 * 富本憲吉 、 板谷波山 のもとへ通い教えを受ける。益子の濱田庄司を訪ねるなど、この頃から芸術家との交流は盛んであった。 |
| 1951年 | (24) | 漆の佐藤正巳や金工の金田正士、石彫の木村賢太郎ら同志8人で「新工人」を創立。 |
| 1955年 | (26) | 「新工人」を通じて知り合った和田協子と結婚。その後、半世紀以上にもわたって共に作陶を行う。 |
| 1955年 | (28) | 南多摩（現・多摩市連光寺）に転居、半陶半農の生活を始める。 登窯を築窯 。 |
| 1960年 | (33) | 備前の陶芸家、藤原啓とその甥、建を知る。その後、啓を度々訪ね作陶する。この頃、金重陶陽とも会う。 |
| 1963年 | (36) | 「辻清明展」（世田谷・五島美術館） |
| 1964年 | (37) | 「 明る寂び 」の概念に目覚め、それを体現する信楽を自分の道と定める。 |
| 1983年 | (56) | 第二十七回日本陶磁協会賞金賞受賞。 陶房に米国の陶芸家ピーター・ヴォーコスが来訪。 |
| 1989年 | (62) | 長野県穂高町の工房焼失。半世紀かけて蒐集した工芸品2000点、書籍が灰燼に帰す。 |
| 1990年 | (63) | ガラス 作品に取り組む。 細部にもこだわった辻の作品ともいえる 茶室 を作る。 |
| 1999年 | (72) | 「作陶六十年記念 辻清明展」（新宿・伊勢丹美術館） |
| 2006年 | (79) | 東京都より名誉都民に選ばれる。 |
| 2008年 | (81) | 4月15日、死去 |



広報用図版⑩：硝子蕪鉢



広報用図版⑪：書 アリのまま

ガラス・書

高台のついた器や、百合鉢など、辻清明は、焼き物の発想を転用してガラスの作品も制作しています。また、のびやかな筆跡で表わされた書など、陶磁器以外の作品にも共通の美意識が見られます。

開催概要

| | |
|----------------|---|
| 展覧会名 | (日本語) 工芸館開館40周年記念特別展「陶匠 辻清明の世界—明る寂びの美」 (英語) The Crafts Gallery 40th Anniversary Exhibition Ceramic Artist TSUJI Seimei: The Beauty of <i>Akaru Sabi</i> |
| 会期 | 2017年9月15日(金)～2017年11月23日(木・祝) |
| 開館時間 | 午前10時～午後5時 (入館は閉館30分前まで) |
| 休館日 | 月曜日(9月18日、10月9日は開館)、9月19日(火)、10月10日(火) |
| 主催 | 東京国立近代美術館、日本経済新聞社 |
| 会場 | 東京国立近代美術館工芸館 |
| アクセス | 東京メトロ東西線「竹橋駅」1b出口 徒歩8分 東京メトロ東西線・半蔵門線 / 都営新宿線「九段下駅」2番出口 徒歩12分 〒102-0091 東京都千代田区北の丸公園1-1 |
| 観覧料 | 一般600円(400円) 大学生400円(200円) 高校生以下および18歳未満、障害者手帳をお持ちの方とその付添者(1名)は無料。 * ()内は20名以上の団体料金、およびキャンパスメンバーズ特典料金。いずれも消費税込。 * 割引・無料には入館の際、学生証・運転免許証など年齢のわかるもの、障害者手帳をご提示ください。 11月3日(金・祝)文化の日、11月15日(水)開館記念日、は無料観覧日 |
| イベント スケジュール | ※いずれも申込不要・参加無料(要当日観覧券) 会期中毎週水・土曜日 14:00～15:00 ◆タッチ&トーク(ガイドスタッフによる鑑賞プログラム) 9月17日(日)、10月8日(日)、10月29日(日) 14:00～15:00 ◆ギャラリートーク 唐澤昌宏(当館工芸課長・本展企画者) |
| 掲載用お問い合わせ先 | Tel: 03-5777-8600 (ハローダイヤル) |
| 公式HP | http://www.momat.go.jp |

●工芸館は2017年11月15日に、 開館40周年をむかえます。

1977年に東京国立近代美術館の分館として活動を始めた工芸館は、今年で40周年を迎えます。2017年7月～2018年5月27日までを、40周年特別期間として、トークイベントやワークショップ、アニバーサリー特典などをご用意しております。

【40周年についてのページ：<http://www.momat.go.jp/cg/40th/>】



①開館記念日、無料ご招待！

11月15日(水)は、本展と本館の「MOMATコレクション」及びギャラリー4の展示を無料でご覧いただけます。

②40歳のアーティストトーク(日程等詳細はホームページにて)

工芸館と同じく1977年生まれゲストを招き、工芸の未来について話を伺います。

③記念呈茶(日程等詳細はホームページにて)

辻清明の茶碗を使って、一日限定で茶席を設けます。

広報用図版 請求票

FAX : 03-3211-7783 (工芸課) 広報担当 行

発信日 年 月 日

| <input checked="" type="checkbox"/> | No. | 作品 |
|-------------------------------------|-----|---|
| | 1 | 「陶匠 辻清明の世界—明る寂びの美」展ポスター |
| | 2 | 作家肖像 1996年 撮影：藤森武 |
| | 3 | 《信楽大合子 天心》 1970年 東京国立近代美術館蔵 撮影：藤森武 |
| | 4 | 《信楽自然釉茶盃》 1992年 東京国立近代美術館蔵 撮影：藤森武 |
| | 5 | 《聚楽掛分茶盃》 1990年 東京国立近代美術館蔵 撮影：藤森武 |
| | 6 | 《信楽耳付水指》 1993年 東京国立近代美術館蔵 撮影：藤森武 |
| | 7 | 《信楽陶缶》《信楽陶缶》《磁器土陶缶》 1982年 菊池寛実記念 智美術館蔵 撮影：田中学而 |
| | 8 | 《信楽帽子》《信楽ステッキ》 1982年 菊池寛実記念 智美術館蔵 |
| | 9 | 《信楽山羊角杯》 1988年 愛知県陶磁美術館蔵 撮影：藤森武 |
| | 10 | 《硝子蕪鉢》 1991年 東京国立近代美術館蔵 撮影：藤森武 |
| | 11 | 書《アリのまま》1997年 個人蔵 撮影：藤森武 |

- ・ご希望の図版の左枠内に✓を入れてFAXでお送りください。
- ・作品図版はJPEGデータをご用意しています。
- ・展覧会広報のみにご使用ください。著作権保護のため、他の目的でのご使用は固くお断りいたします。
- ・掲載見本を広報担当者へご寄贈ください。(Webサイトの場合は掲載時にお知らせ下さい)

ご担当者名：

E-mail：

貴社名：

出版物・放送番組・ウェブサイト名：

URL (http://www

)

掲載予定号・発行日/放送・公開日時等：

電話番号：

()

Fax:

()

*展覧会をご紹介いただける場合は、読者プレゼント用招待券をご用意いたします。

希望しない/希望する (組 枚)

〒

チケット送付先：